

## 《平成29年度 発達支援研究部門 研究成果》

平成29年度（2017.4~2018.3）は、学内外共同研究などを通して、原著論文として欧文8編、著書11編を含め、その他総説・講演など多数の研究成果を発表してきた。本研究成果の一部は、新聞やテレビなどのメディアで報道され、社会に広く発信することができた。以下には、主な研究成果の概要をまとめる。

### 1. 『子どもの脳を傷つける親たち』（NHK出版新書）（友田明美, 2017.8）

週刊朝日（2017年10月6日号）の「書評」をまとめて代えて以下に記す：

”・・・日本語で「不適切な養育」と訳される「マルトリートメント」によって、子どもの脳が物理的に変形することが明らかになったらしい。添付された何枚もの脳の写真が、その悲惨な研究成果を証明している。問題となるマルトリートメントには、暴力的な虐待だけでなく、無視、放置、言葉による脅し、威嚇、罵倒、そして子どもの前で行われる夫婦喧嘩も含まれると友田は指摘する。これらは子どもがいる家庭ならあってもおかしくないが、強度や頻度が増したとき、子どものところは確実に傷つく。こころとは脳のことである。脳はマルトリートメントによるストレスを回避しようとし、その結果、変形していくのだ。傷ついた脳はその後、学習意欲の低下や非行、うつや統合失調症などを引きおこす。大人ですら過度なストレスは脳に大きな影響を与えるのだから、発達過程（乳幼児期、思春期）でマルトリートメントに晒された脳がどうなるか、素人でも理解できる。では、どう予防すればいいのか、傷ついた脳を回復させる方法はあるのか、脳が傷ついたまま親になっている場合はどう救うのか。友田は愛着形成の重要性を説きつつ、具体的な対策を紹介する。ケーススタディも豊富で、多くの人の参考になるだろう。〈子どもに必要なのは、安心して成長できる場所です。それを与えることができるのは、われわれ大人だけです〉この本を読んでいる間、私は何度も亡き両親に感謝した。”

### 2. 社会性発達とOXTR遺伝子多型の関連性（Nishizato, Fujisawa et al., 2017.5）

福井県永平寺町で出生した子の発達に関する前向きコホート調査参加者のうち、同意が得られた母子を対象にして、Gazefinder®による視線計測を用いて社会性発達を評価した。社会性発達評価とオキシトシン受容体（OXTR）遺伝子多型との関連性を解析した結果、月齢との交互作用が見られ、発達とともに視線の選好パターンが有意に変化するものの、OXTR遺伝子多型により選好パターンの発達が異なっていることが明らかとなった。これは月齢により異なる側面の社会性が発達するが、その発達の程度はOXTR遺伝子多型によって異なる可能性を示唆された。

### 3. COMT遺伝子多型が小児期ADHDの安静時脳活動に及ぼす影響（Mizuno et al., 2017.7）

注意欠如・多動症（ADHD）は、発達段階に不釣り合いな不注意、多動性、衝動性の症状で特徴づけられ、実行機能障害を主な要因とする神経発達症である。本研究は、ADHD児では実行機能に関与する大脳皮質-小脳の神経ネットワークが異常を示し、その神経ネットワークはCOMT（カテコール-O-メチル基転移酵素）遺伝子多型と関連していることを示した。ADHDの病態の多様性の理解および診断・治療方法の改善に寄与しうると考えられる。

### 4. 逆境経験のタイプとタイミングが青年期のメンタルヘルスに及ぼす影響（Nishikawa et al., 2018.2）

本研究では、過去の逆境経験のタイプやタイミングがその後（青年期）のメンタルヘルスに及ぼす影響について検討を行った。1038名の高校生を対象に、10種類の逆境経験の有無、その出来事から感じたストレス、現在のメンタルヘルス等を調査した。分析の結果、逆境経験のタイプ

は、その後のメンタルヘルスへの影響から大きく分けて3種類へと分類され、時期では幼少期に受けた逆境経験であるほど、青年期のメンタルヘルスに悪影響を及ぼしていることが明らかとなった。本研究から得られる成果は、青年期のメンタルヘルス問題においては、影響を及ぼしている出来事のタイプやタイミングによって、経過や予後が異なることを示唆している。

#### **5. 養育者の抑うつ気分の見える化による子育て困難予防に向けて (Shimada et al., 2018.3)**

就学前児を育児中の養育者を対象に、養育・共同養育をする上で重要な社会能力である、子どもまたは大人の気持ちを推測する課題を遂行中の脳機能計測を行った。抑うつ気分が高いほど、大人の気持ち推測課題時に脳活動が低下する部位として右下前頭領域が見出され、子どもの気持ち推測課題時に脳活動が低下する部位は見出されなかった。なお、どちらの課題成績（正答率）にも低下はなく維持されていた。本結果は、大人や子どもとの対人関係性の違いに応じた社会脳機能における異なるストレス脆弱性を示唆している。また、社会脳機能の低下は、健康な養育者の抑うつ気分（未病・準臨床域）に関連し、臨床域の大うつ病の社会的認知機能の低下に先立つ前駆現象の存在を示唆しており、対人関係性の歪みに至る前の予防的指標の開発に繋がることが期待される。